

この最後の者にも ―― 〈独立的〉キリスト教

まえおき

只今、ご紹介にあずかりました武藤陽一でございます。ご丁寧なご紹介を頂いて恐縮しております。

この度は、私のような全く無名の人間を、この永い歴史と尊い伝統のある教会の創立記念集会にお招き下さいまして、大変恐縮すると共に、はなはだ光栄に存じております。参上するのに、どうしたらいいかと思いましたが、自分の話のことを考える前に、是非その日の朝は、皆様の礼拝に参加させて頂こうと思いました。そうしましたらば、これはどうしても妻も連れて来なければならぬと思います。そして、今日は二人で参上いたしました。

今朝、小林先生のお話を伺いました。それは何と

アンテオケの教会のお話でありました。使徒行伝を続けてご勉強になってきて、丁度今朝そのところに当られたということですが、これは決して偶然ではなくて、「アンテオケの教会」の創立記念の集まりに、あのアンテオケの教会の信仰と希望とが語られたのを伺いまして、大変感激致しました。

もう私がお話をする余地はないのでありますが、それでは責めを果たしたことになりますので、拙い話であります。暫くの間、聞いて頂くことに致します。

井上先生からお手紙を頂戴しました時、身の程も弁えずに、喜んで早速にお引受けしてしまいました。それはもちろん先生のお言葉が大変ご親切だったの

で、そういう決心をしてしまったのでありますけれども、それと共に、私は独立教会を殆ど何も存じ上げませんのに、常々、何とはなくこの教会を懐かしく思っていたからであります。その理由を二つ申し上げますが、一つは、内村鑑三の『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』を読んで以来のことです。今年、この教会の創立百十二年ということとでありますから、多分それは百九年位前のことではないかと思いますが、ある晩祈禱会があった。當時も教会は信徒が順番に牧師の役目を果していたというのですが、その晩はたまたまフレリックこと高木玉太郎が、牧師の役目を果しておりました。ところが、この牧師さん、疲れて、皆が祈っている間にすっかり眠りこけてしまったという。皆の祈りが終わっても、牧師が祝禱をして会を解散できず、皆痛む足を擦って、もう終わりにしてほしいと思うのに、集会が終わらなかつたというのであります。

先程、記念の昼餐会の時に、大島正健先生の話が

ありましたが、その当時、この青年たちは牧師が祝禱を献げなければ集会は終わらないと、固く信じていたようであります。それで困ってしまいました、ヨナタンこと内村鑑三が、神様、牧師は寝てしまつておりまして、集会が終わりませんので、私が代わつてこの会を閉じることをお許し下さいと祈り、祝禱を献げて祈禱会を終わったというのであります。その時のことを彼は、「しかしその晩は我々だつてみな眠かつたのだから、一切を許すことができた。聖使徒ですら、主が祈り給いつつある時に眠つてしまつたではないか。まして我々年弱のクリスチャンが、激しい労働と満腹の後で、居眠りをやらかそうとも、それは無理もないというものだ！」と言つております。

牧師先生の説教中に信徒が居眠りをするという話によくありますが、牧師先生その人が眠つてしまつて、会が終わらないという話は、まず聞いたことがありません。しかし、こうした話を聞いて、この教

会に親愛の情を抱かない人はないでありましょう。

もう一つご紹介致します。先程の小林先生の話に「有能な青年集団」という言葉がありました。本当にこの教会創立時の教会員たちは有能な青年集団でありました。彼らは疲れて眠りこけたこともあったのですが、何よりも食欲旺盛であった。しばしば愛餐会を開きまして、その時には、牛肉、豚肉、鳥肉、玉葱、蕪、ジャガ芋などを、みんな一つの鉄鍋に投げ入れて煮て、「クリスチャンは男も女もその鉄鍋をとりかこんで、煮えるそばから取出して食べた」というのでありますが、それを内村はコメント致しまして、「『同じ釜の飯を食った人々』という我々の間によく知れ渡った諺は、血肉の繋がりにも似た親しさを指すものである。一つの同じ目的に向かつて共に闘い、共に苦しまねばならぬ人々の間には、牧師が授ける聖餐のパンとブドウ酒以外の、あらゆる種の和合一致が必要だということを、我々はかつて信じ、今も信じている」と言い、「然り、我々は

一つである。我々の鍋で煮た鶏が一羽であったように、またヨナタンとヒュー（藤田九三郎）とが、ストーブから出して分けあった大きなジャガ芋が一つであったように」と語っております。

キリスト者の一致をこんなに美しく描いた文章は他にそうあるものではないと思いますが、『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』の第三章は、人を一気に懐かしさの中に投げ込んでしまうような、こうしたエピソードに満ち溢れております。

もう一つの、私がこの教会を知りもしないのに懐かしさを感じていた理由は、先程もご紹介下さいました私の信仰の恩師山本泰次郎に関わるものであります。山本泰次郎は内村鑑三に、その晩年十年師事して、信仰を学んだ人であります。山本先生は太平洋戦争の末期帯広に疎開しておりました。その滞在は敗戦を狭んで僅か三年程でありましたが、先生はここで、先生ご自身の言葉によると「聖霊の恩賜に浴し」、伝道の志を抱いて帰京され、一九五〇年に

「聖書講義」という名の聖書雑誌を再刊しまして、以後、一九七九年でありますから今年で亡くなられて十五年になります。一九七九年の永眠に至るまで、ひたすら福音を語りました。

北海道はその先生にとっては、靈魂の故郷でありました。先生には『書簡による内村鑑三伝』が三作として残されております。二十歳年長のD・C・ベル、同級の宮部金吾、弟子の斉藤宗次郎の三人に宛てた手紙によるものですが、その第二篇は『宮部博士宛ての書簡による内村鑑三』であります。この本は刊行は五二年であります。それに先立つ一九四九年の秋のある日、九十歳になられる宮部博士を、ここ札幌の書齋に訪ねて聞き書きをしたという懐かしい話から書き始められています。私は先生から親しく、その時の宮部先生の様子などを、何度か伺ったことがございます。

このような訳で、お招き頂いた方には参上せねばと、勝手に思い込んでしまいました。迂闊にもお

話を引き受けてしまった次第であります。さて、どのようなお話を申し上げようかと大いに困惑しました。

今日の題の「この最後の者にも」、これは私は決してラスキンを気取ったわけではないのであります。ただイエスの有名な譬え話の一つ「ぶどう園の労働者の譬え話」の中の一句を選んだに過ぎません。副題に付けました「～独立的～キリスト教」、これは内村鑑三晩年の小樽講演「北海道特産物の一つとして見たる独立的キリスト教」から取ったものであります。皆様、あるいはこの題をごらんになって、一体この二つの言葉にはどんな関係があるのかと、疑問に思われたかも知れません。

今日は、先ず「独立」ということから話を始めまして、これを「この最後の者にも」というイエスの言葉、あるいはむしろこの言葉が出てくる譬え話に関連づけてみたいと考えております。うまく関連づけられませんでしたならば、どうぞお眠り下さって

結構でございます。

北海道の皆様は、北海道特産物の話をするというのは、はなはだ面映ゆいのでありますが、これは私の内村傾倒の故と、ご勘弁願いたいと存じます。

懐かしさと申しましたので、いま気が付いて一つ申し上げておきたいのですが、先程井上先生が講演の前に讚美歌を一つ歌いたいが何かあるかと聞いて下さいました。急なことでしたし、私はあまりそういうことに頓着しないものですから、「いや何でも結構です、先生お選び頂ければ」と申し上げました。実はその時に、あの「北の果てなる」が頭に浮かびました。そうしたら先生がちゃんとそれをお選び下さいました。あれは皆様よくご存じのように、キャプテン・クラークの愛唱歌でありまして、ああやはり自分はこれから独立教会で話をするんだなどと励まされて、とても嬉しく存じました。

独立のキリスト教

皆様の教会の名前には、独立の文字が冠せられて

おりますが、どのような理由によるものでしょうか。歴史的に申しますならば、それは教会の歴史を、もっと端的に言えば、教会創立者達の意気込みを現わしたものであるうと思えます。「北海道特産物の一つとして見たる独立のキリスト教」という、この内村の講演によれば、要するに、それは第一に外国宣教師の援助に頼らないこと、第二に外国伝来の宗派に属さないこと、すなわち、日本人キリスト者、あるいは、日本人の教会としての経済的独立と教義的独立とを示す「独立」であつたと思われます。

内村は晩年、「独立五十年」（という短文があるので）を回顧して、自分は信仰の初めから独立を決心し、五十年後のこんにちに至るまで、大体において、この決心を實行してきたと言っております。当時としてこの決心を貫くことは大変なことで、あるアメリカの学者が内村に手紙を寄せまして、彼の独立を「テリブル・インデペンデンス」（恐ろしき独立）と呼んだというのも、むべなるかなと思われ

ます。皆様は、そういう先人たちの御労苦をよくご存知であります。

しかし、こんにちの私どもにとっては、内村がそう言ったことも既に半世紀以上も昔のことでありまして、敗戦とその後の激動を経て、世情が一変し、キリスト教世界もまた決してその例外ではないこの時代に、独立的キリスト教とは何か、キリスト教の、あるいはキリスト信者の独立はいかに在るべきかという問題は、なかなかの難問であると思います。

これは井上先生が前もってお送り下さったのですが、「独立教会の現況」という小さいパンフレットの中に、「『独立』の精神とは、人に頼らず、神にのみ依り頼む信仰である」とあります。いみじくもここで言われておりますように、こんにち「独立」は、その有りようをうんぬんする、すなわち、外国から援助をもらうとかもらわないとかいうような、そうしたことよりも、むしろ、その精神をこそ探るべきものなのであります。

そこで私は先ず内村の論説の中に、独立の精神を少しく探ってみたいと存じます。今日の話の前半は、ほとんど内村によって話を申し上げることになりませんが、何とぞお許し願います。

ところで「独立」ですが、キリスト教の思想家、あるいは伝道者の中で、内村ほど独立を語った人は珍しいと思います。パウロに「わたしは気が狂ったように言う」という表現がありますが、内村もまた気が狂ったように独立を言い、独立を主張致しました。彼はやはり五十年の生涯を顧みたときに、「五十年間、独立の福音を説いた」と言っておりますが、もちろん聖書に「独立の福音」などという言葉はございません。

彼のもう一つの主張に、ご存知の無教会ないしは無教会主義があります。ちなみに、これも先程井上先生がご丁寧にご紹介下さったのですが、私の恩師の山本泰次郎は、教文館版の内村全集全五十七巻を編集した人であります。この先生の編集された「信

仰著作全集」の第二五巻というのは大きな索引巻であります。その索引でこんど見てみまして驚いたのですけれども、「無教会」とそれから「独立」、もちろんそれに関連した無教会主義であるとか、独立の何であるとかいうような関連の言葉も含めてであります。これがページ数でほぼ同量であります。

「無教会」という語は、内村は無教会主義のキリスト教を唱えたと辞書にまで載っている位ですから、よほど「無教会」という言葉を使っただろうと思われるのですが、その使用は案外に少なく、独立と同量であるということを考え合わせますと、内村がいかに独立が好きで、独立ということを大切に考えていたかを、改めて思わせられたのであります。ちなみに内村は、「独立信者」という言葉を「無教会信者」という語と、ほとんど同じ意味で使っているようであります。

それでは、独立とは何か。キリスト信者にとって独立はいかなる意味をもつものか。いまさらであり

ますけれども、彼によってもう少し考えてみたいと思えます。

だいたい「独立」という語は聖書には無いのです。このことは内村自身が懇切に説明しております。彼が言うには、このインデペンデンスと、いう語は、十七世紀の英国でピューリタン、清教徒たちが「信仰の自由とこれに伴う国家の改造を唱えし時に、彼らの大主張を言い表すに他に言葉なきをもって」、すなわち適當の言葉がないので、ここで初めてラテン語のデペンシヤ、「依頼する」という語だそうですが、これに否定の接頭語を付けて「インデペンデンス（頼らず）」という新しい言葉を造った、鑄造した。これが大雑把であります。彼の説明であります。

内村は、「この語は聖書にはないが、よく聖書思想を表わすものだ」と言い、聖書の根拠として、例えば、ロマ書の十三章八節「互いに愛し合うこと」の他は、誰に対しても借りがあつてはならない」というあの言葉や、これはテサロニケ後書三章八節で

ありますが、「あなたがたの誰にも負担をかけまいと、日夜、労苦し努力して働き続けた」、「働かない者は、食べてはならない」など、その他ガラテヤ書などから、主にパウロの言葉を挙げております。

独立とは、すなわち「非依頼主義」である、頼らないということである。しかし、その非依頼、頼らないということは、何処から来ているかと言いますと、実は頼ること、依頼から来ている。非依頼は依頼によるのである。彼の言葉によると、「神にすがの依頼心ありて、初めて真の独立と、威厳と自尊とはあるなり」、あるいは「我は人によらず、また己に頼らず。我はわが救い主イエス・キリストに依る。彼に頼るは独立的依頼なり、依頼的独立なり。勇ましき依頼なり、優しき独立なり。イエス・キリストに依りて、他者に頼りて独り立つ者なり」というのであります。特に、「勇ましき依頼なり、優しき独立なり」などという言葉は、極めて内村らしいと思います。要するに徹底した神、キリスト、すな

わち他者依頼が、自分をも含めて、世の何者にも頼らない非依頼主義、すなわち、独立を生む、故に独立は聖書の信仰が生む必然である。聖書の信仰が生む必然的な徳である、靈性である、エトスであるというのが、内村の主張であろうと思っております。

先程も小林先生から教えられたのでありますが、初代のキリスト教徒たちは、決していわゆる政治運動をしたり、革命を起こそうとすることはなかったけれども、彼らの生き方は、そのまま皇帝礼拝をも否定する程に独立的であった、皇帝礼拝をも相対化する力を持っていたのと、全く同じであろうと思うのであります。

ここでちよつと脇道に入つて申します。内村の強い主張には、いわゆる聖書主義、これにはいろいろな意味があると思ひますが、ごく簡単に、聖書を文字通りに信じて、それ以外の理解を許さないというような考え方と言つたらいいかと思ひますが、そういう聖書主義からはおよそ許されないものがあるよ

うに思います。この「独立」がそうありますが、独立、独立というが、そのような語は聖書にはないではないか。「無教会」もそうであります。教会が無いなど、とんでもない。また、彼の生涯をかけた大きな主張の一つであった、非戦論でさえもそうであるように思います。聖書には確かに平和は説かれていますが、平和主義は必ずしも聖書のものではない。聖書から聖戦、神が戦い給うという思想や、正義の戦争を主張する人は幾らもいます。

内村は聖書の字面ではなく、その精神を読む。部分ではなく、聖書の全体を読もうとします。彼の信仰の中心は贖罪であると、しばしば言われますが、しかし、私どもが驚くのは、彼が直接に贖罪を説いたものは極めて少ないということです。先程の山本泰次郎の編集による内村全集は、聖書に関わる巻が全部で四十一冊ありますが、これはもちろん山本の編集によるという限定付きではありませんけれども、その内、贖罪として分類されたものはたった一冊し

かないのであります。しかし、内村のどの一篇を取っても、それは彼の贖罪信仰の表白であることは間違ひありません。内村という人は、その表現が聖書にあるかないか、聖書の言葉と矛盾しないかどうかというようなことには、およそ無頓着でありました。先程佐藤さんがおっしゃったように、決して教条的ではない。これは内村ばかりではなく、この教会の創立者たちは皆そうでありました。

話を元に戻しまして、次に独立の現実、この世の生活の中で独立するということは、どういうことかということ、更に内村に従って見てみます。

第一は、もちろん金銭的独立であります。彼はこう言います。「多くの人は、宗教的事業における（これは、どんな事業でも同じだと思えますが）金銭的独立を小事であると思う。しかし決して小事ではない。金銭的独立なくして、実は思想的または信仰的独立はない。余輩は自分の意地を張らんとして独立を維持したのではない。神より聖き啓示に接して、

これを分かつたん為に、多くの苦痛を忍んで、金銭的には絶対的独立を実行したのである。高き深き愛の為の独立であると思う」と言っております。

また、内村は「日本人は金銭の何たると、その貴き理由とを知らない」と批判をしまして、「金は人たるの威厳を維持する為に必要である」と言っています。これなどは、本当にお金というものの大切さを知っている人の言葉だと、私は思うのであります。金銭的、経済的独立があつて、初めて思想的独立があるとするのは、實際家の内村らしい発言であると思います。

経済的に独立することは、精神的に独立することであり、精神的に独立することは、個人の独立、あるいは人格における独立であります。そして人格の独立は、人に自由をもたらしめます。彼はこう歌っています。「金にもまさり、名誉にもまさり、知識にもまさり、命にもまさる。ああ、なんじ独立よ！……：：：独り真理と共に在り、独り神と共に在り、独

りキリストと共に在りて、我は自由である。」これは、*“Alone with God and Me”* という英文著書

(もちろん彼の訳文も付いています。)の冒頭に掲げられた短詩であります。この自由によつて人は、これも彼の言葉ですが、「独立の意見、独創の意見を抱いて」生きることが出来ます。「独立心なき者は、人に頼るにあらざれば、他人と相団結する。独り立つの勇氣なし。故に、何人にか頼らざるべからず。独り立つて、独り行う、これを独立の人とは言ふなり。」これは自ずから、私ども日本人のよく言われる集団志向と言いますか、人と一緒になければ何も出来ないというような、私どもの心性、メンタリティ批判となつていふように思います。個の確立こそが普遍に通ずるといふことの示唆も、ここにはあるように思います。

また内村は、『余はいかにして』の中で、まだ彼が若い時であります。既にこの教会が独立した時の喜びと感激、その感慨をもつて独立を論じている

のでありますが、そこでは、「独立とは、自分自身の能力を自覚して、それを現実化することである」と言い、更に「独立の人とは、神と自己とを信ずるのあまり他の援助を多く要せざるものである。」しかし、「他人の補助を受けないだけで独立にはならぬ。単独の力で事業を進めねばならぬ」とも申しております。

それから、これは直接独立について言ったものはありませんが、一九二四年のいわゆる排日問題の発言の中で、「独立は絶縁ではない。(我々がアメリカから独立するといっても、アメリカとの関係を厳しく見るといっても、それは絶縁ではない。)肉において断ちて、霊において繋がるの道である。双方が独立人たらずしては、深い真の友人たることは出来ない」とも言っております。これはこんにちの日米関係をも思い起こさせるような優れた発言だと思いますが、私は、ここに彼が「深い真の友人」と言ったことにも、色々と思わせられるのです。

皆様よくご存知のように、宮部先生と内村は、本当に友情に結ばれた素晴らしい友人でありました。それは、私は全然存じ上げませんが、彼の言うところから察するに、宮部先生は非常に穏やかで、包容的であった。それが内村の激しさや、あるいは彼の強さ、そうしたものをよく受け入れていたので、あの性格の全く違う二人が、部屋を共に分け合って勉強を始めた時から、死が彼らを分かたずまで、実に素晴らしい友情を維持することが出来た所以であった。それはお互いが本当に独立人であったからではないでしょうか。内村という人は、自らをヨナタンと呼んで、自分は「ダビデ・ヨナタンの友情」のような友情の人になりたいと願ってその名前を付けたと言いますが、彼は決して友人を多く持つことが出来るような性格ではなかった。しかし、そこには宮部先生のような友人がちゃんと与えられて、そして彼らはお互いに独立人でありながら、お互いに自由に生きながら、「深い真の友人」であることが出来た

のだと、私は深い感慨をもって思わせられるもの
あります。

注意しなければならぬことは、独立は、決して
意地を張ることではない、頑固であることではない、
精神的、信仰的プライドではないと思います。それ
は彼が言うように、「優しき独立」であります。内
村が愛唱したもののばかりを集めた『愛吟』という小
さな本があります。彼はその中にプロクター夫人と
いう人の「偉大なる人」という、次のような詩を収
めているのですが、この詩を自分の愛吟の中に入れ
るような人であったのであります。「愛の為に真の
心をもって、惜しまず与うる人は大いなり。されど、
愛の為に臆せず物を受くる人は、さらに大いなる人
と称えん」というのです。内村は、このことをよく
知っている人でありました。先程昼食会の折、お名
前を知りませんで申し訳ありませんが、ロンドンで
の経験をお話しして下さった方がおっしゃったよう
に、我々は何時も意地を張って、自分でと思う必要

はない。必要な時には、喜んで謙虚に、人の助けを
神の助けとして受ける雅量を持っていなければなら
ない。与える人も偉大であるけれども、愛の為に臆
せず物を受ける人は、さらに偉大な人と称えられる。
内村はそういうことも良く知っている人であったと
思うのです。この詩を読みますと私は、先程彼が挙
げた聖句（ロマ一三・八）であります。パウロが
「君達は互いに誰に対しても、何ものも負うな」と
言ってから、「しかし愛することは別にして」と加
えた、あの言葉を思わざるを得ません。あれは日本
語訳のように、「互いに愛し合うことの他は」と先
に言っては、パウロの気持ちは出ないと思えますね。
「誰にも負うな、何も負うな、独立であれ。でも、
愛することだけは別だよ」と、付け加えざるを得な
かったのが使徒パウロなのであります。

また内村にかえりますが、内村は「独立を説くな
かれ。キリストを説くべし。独立は、ひとりこれを
己の身に行つて、これを人に勧むるなかれ」と勧め

ているのであります。

最後に、彼の独立観、これは独立について言ったものではありませんが、独立観の総括という意味で、一つの文章を紹介しておきます。「自覚」と題する一文で、五十四歳の時のものです。「かくの如くにして、神に頼るの自覚は謙遜であつて、同時にまた独立である。自ら、己を低うすると同時に、また神に頼りて高く揚げらる。(この「神に頼るの自覚」を、内村はこの文章の中で、「われ無一物の発見」と言っています。すなわち自分は神の前に無一物であるから、神に頼る以外にないという自覚のことです。)われは万事を知ると言わない。然り、我の知識は全からずであつて、我が知識は宇宙の一小隅に限らる。されども、わが知るを得しだけの知識は、これ神がわれに示したまいしところにして、われの確知するところである。われはまた万事をなし得るとは言わない。されども、われに有るだけの能力は、これ神がわれに分け与えたまいしところにして、わ

れの確有するところである。われは神に対しては、弱き能力なき嬰兒であるが、しかし物と人に対しては一人の成人である。われは、ある事を神に示され、ある事をなすべく、ある力を与えられたる者である。われは真理と事業に対して絶対的に嬰兒ではない。われは信じて疑わない、われは教会の赤子にあらざること。を。」

皆様は、「独立」教会の会員でおいでになるのでありますから、ひとりひとり「独立」の信者でなければならぬということ、当然のことであろうと思ひます。

この最後の者にも

以上が私の話の半分ですが、後半は、「この最後の者にも」という言葉、あるいは、この譬え話、マタイ伝二〇章一―一六節の「ぶどう園の労働者のたとえ話」を考えてみたいと思ひます。この譬え話は、四十に余るイエスの譬え話の中でも、かなり特異なもので、神の国の福音の本質をよく伝えて

いる大切なものだと思われるのですが、不思議なことに内村はこれに全然触れていません。あれだけ聖書を語った人が、この譬え諸については何も言っていないということ。私にはそのことは奇異に思われるのでありますが、同時に、これは随分勝手なことを申して恐縮ですが、何となくその理由が分かるような、分からないでもない気がするのです。少々思い切った言い方をしますと、この話は、内村には余り合わないのかも知れません。それで、意図しないまでも、何となく一生遂にこれを講解することはなかったのではないかと、私は勝手に考えております。しかし、これもまた私の勝手な理解でありますが、この譬え話は、内村の言う「独立」とか、あるいは「独立的キリスト教」というものを、別な面から補完して、彼の「独立」の、先程私は彼が独立と言った時とは、今私どもは余りにも違う時代に生きていると申したのですが、そういう私どもに、内村の「独立」の現代的意味を明らかにしてくれる

ようにも思うのであります。

内村は我々が前大戦で敗北することを、その二十年も前に、いわば預言をしたような洞察力のあった人でありますが、しかし、彼にも大きな歴史的な限界がありました。その歴史的限界を超えて語りかけるものを、この譬え話から聞いてみたいと思うのであります。テキストを読んでみます。

天国は、ある家の主人が、自分のぶどう園に労働者を雇うために、夜が明けると同時に、出かけて行くようなものである。彼は労働者たちと、一日一デナリの約束をして、彼らをぶどう園に送った。それから九時ごろに出て行って、他の人々が市場で何もせず立っているのを見た。そしてその人たちに言った、「あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。相当な賃金を払うから」。そこで、彼らは出かけて行った。主人はまた、十二時ごろと三時ごろとに出て行って同じようにした。五時ごろまた出て行くと、まだ立っている人々を見

たので、彼らに言った、「なぜ、何もしないで、一日中ここに立っていたのか」。彼らが「だれもわたしたちを雇ってくれませんから」と答えたので、その人々に言った、「あなたがたも、ぶどう園に行きなさい」。さて、夕方になって、ぶどう園の主人は管理人に言った、「労働者たちを呼びなさい。そして、最後にきた人々からはじめて順々に最初にきた人々にわたるように、賃金を払ってやりなさい」。そこで、五時ごろに雇われた人々がきて、それぞれ一デナリずつもらった。ところが、最初の人々がきて、もっと多くもらえるだろうと思っていたのに、彼らも一デナリずつもらっただけであった。もらったとき、家の主人にむちは一時間しか働かなかつたのに、あなたは一日じゆう、労苦と暑さを辛抱したわたしたちと同じ扱いをなさいました」。そこで彼はそのひとりに答えて言った、「友よ、わたしはあなたに対して

不正をしてはいない。あなたはわたしと一デナリの約束をしたではないか。自分の賃金をもらって行きなさい。わたしは、この最後の者にもあなたと同様に払ってやりたいのだ。自分の物を自分がしたいようにするのは、当たり前ではないか。それともわたしが気前よくしているので、ねたましく思うのか」。このように、あとの者は先になり、先の者はあとになるであろう。この譬え話は、もう皆さんよくご存知とと思いますが、簡単に説明をしながら譬え話を辿ってみます。大体、譬え話というのは話そのものは単純なものですから、読めばその通りでよくお分かりになります。この大きなぶどう園を持っている主人が、自分のぶどう園で働く労働者を雇う。常雇いというのはほんの数人で、後から出てくる監督などがそうでありましょうが、それに任せて、自分は朝早くから広場に出掛けて行って、労働者を集めるといふ話です。夜明けから町の広場へ出掛けて行って、いわゆる日雇

労働者を雇う。自分のことを申して恐縮ですが、私は敗戦直後に、当時進駐軍と言っていたアメリカ占領軍の労務者として働いた経験がございますが、その時、朝早く東京駅の駅前広場に労働者が集まった。そうしますと、アメリカ軍のトラックが参りまして、仕事場に連れて行かれる。昨日、私は羽田空港を發つて来たのですが、この羽田飛行場で私はしばらく働きました。そこで初めて私はブルドーザーという凄いものを見て、こんなものを持っている人たちと何で戦争したのかと思つたことを覚えておりますが、そういうふうにして私はしばらく日雇い労働者の経験をいたしました。夕方戻つて来て、賃金の支払いを受けるということでした。

ヨセフスというユダヤ人の歴史家がございますが、彼によると、エルサレムのヘロデ神殿完工当時は、これはいわゆるユダヤ戦争が始まる三、四年前に完成したと言われるのですが、その頃のエルサレムには、一万八千人からの失業者がいたということです

から、働きたい人間は山ほどいたのでしょう。そういう人たちが集まっている所へ行つて、労働者が欲しいこのぶどう園の園主なども人を雇うわけです。

一方、ぶどう園の方では彼の執事役の人間が、集まつて来た労働者を指揮して、早速に収穫するわけですが、とにかく収穫期でありますから幾らでも手が欲しい。送り込まれて来る労働者だけではとても間に合わない。そこで主人は九時頃にも、昼頃にも、午後の三時頃にも広場へ行つて、まだ仕事に就けないでいる労働者を雇う。最後には、何と夕方の五時頃にも行つて人を雇つたという。さすがにこの時には、この主人は「一体、君達は何でこの時間までうろうろしているのか」と聞いております。しかもこの人はそう言いながらも「仕事がないならば、私の所へ行つて働け」と言つて、雇っているのです。もう一日の仕事が終わる頃になつて、人を雇うというのは不思議な気がしますが、聖書注解者というのはいろいろと注解するもので、NTDという注解叢書

を書いている注解者によれば、「例えば、雨季になり、夜、霜が降る直前の豊かな収穫に際しては、そういう事例があった」そうであります。それから賃金のことですが、この主人は早朝に雇った人たちに「一日につき一デナリの約束」をしています。一日一デナリというのは、当時の日雇労働者の平均的賃金であったと言われています。ですから、後から雇われた人たちには「相当な賃金」を払うからと言っている。これは当然ですね。一デナリの何分の一かに相当するものが支払われるだろうということでもあります。後から行った人は、そう思って雇われたのであります。ここまでは、この話はごく普通の話であります。

ところがこの譬え話の後半になりますと、支払いが始まるのですが、その支払いの段になると、この話は普通の話ではなくなるのです。そもそも譬え話というのは、ごく日常的、生活的、具体的な材料を使って作った話で、これを聞く人は、自分のことと

思い合わせて、ああ成程ねと納得が出来るような話なのですが、一方これはまた作った話でありますから、どこかに何かそれはおかしいんじゃないかと言わざるを得ない、何かひっ掛かるものがある。そこが話を作った人の目的であるわけですが、イエスという方はそれが非常に上手であられたと言うべきでしょう。聴衆が話を聞いて、そうだねと言っているうちに、はたと考えさせられるところがある。それがこの話では後半に来るのです。要するに、この主人は朝から一日中働いた人にも、昼から働いた人にも、そして、最後ほんの一時間しか働かなかった人にも皆、同じ賃金を払ったというのです。それはおかしい。学生がどこかの店でアルバイトをしても、八時間労働で、時間給幾らだから八時間で幾らになるというのに、その日半分の時間しか働かない、まして一時間しか働かない人もいて、その人達がみな同じ給料をもらったとしたら、それでは朝から働いた学生たちは面白くないでしょう、文句を言うでし

よう。

さてこの話では、これも変といえれば変ですが、ぶどう園の主人は、さつき雇ったばかりの人から賃金を払ってやれと監督に申しつけています。みなが一列に並んで、このような台の所で払ったのでしようが、見ていると、さつき来たばかりの連中から半日の人もみな一デナリちゃんともらっている。朝から働いた連中は、これじゃ自分たちには主人は色をつけてくれる、少なくとも彼らよりはいい給料をくれるだろうと、こう思ったと言うのですね。これは当然でしょう。長い時間働いただけじゃやない、一日中暑い中を辛抱して働いたと書いてあります。ところが、主人は一時間しか働かなかった人にも、丸一日働いた人たちにも、全く同じ一デナリずつ支払った。そして朝から働いた人たちの不平に対して、私は約束どおりの賃金を払った、どこに文句があるのか、私の親切が妬ましいのか、と突っぱねております。約束どおりのものが支払われたのだから、文句の言い

ようがないが、どうも釈然としないというのが、朝から働いた人たち、そして実はこれを読む私たちの気持ちではないでしょうか。この主人のやり方は不公平ではないか。大体、現実社会でこのようなことが行われれば、正直者は働く意欲を失うでありましょうし、怠け者を奨励することになりかねません。私たちは、その悲惨な結果の一つを、つい最近も共産主義国家の崩壊の中に見たばかりであります。それでは、この話は一体何を言おうとしているのか。荒井献という聖書学者は、この譬え話は「典型的、規則的状況の進行を報告する譬えではない。一回的行為として、人に躓きを与えかねない出来事を物語る譬え話である」と言っております。その躓きの石に躓いて、私どもは如何なる理解をもって、立ち上がるべきかということが問われているのであります。

そこで考えてみますと、そもそもこの主人の賃金支払い是不公平だと感じた、この朝から働いた人た

ち、と言うより私たちは、皆、自分が早朝から丸一日働いた労働者だと、勝手に思い込んでいたのであります。そうではないでしょうか。でも、いつもそうであるとは限らない。よく考えてみれば、私たちの誰が自分が夕方の五時に来た労働者ではないと言えるでしょうか。体の具合が悪くて、朝早く起きられないという人もある。家庭の事情で、早朝にはとても広場に行けない人もいる。広場に行ったけれども、ちよつとした行き違いで雇ってもらえない人もあるでしょう。私は先程申し上げた小さな経験で知っているのですが、労働者がわつと集まってくる、中にはもちろん手洗いに行つて来たい人もいる。ちよつと行つて来たすきにトラックが来て、皆を乗せて行つてしまふ。定時にいつも同じ所へ連れて行つてくれるトラックに乗れなかったという経験がございます。人生というものは、どうもそういうものらしい。ちよつとしたことで、よく狂うと言いますけれども、変わつてしまふことも、もちろんあるので

す。何かぐずぐずしていたというだけで、自分の思った通りにならないということは、しばしばあります。下手すれば、その日一日仕事を棒に振るといふようなこともあるわけです。もちろん、中には怠け者である為の人もいますでしょうが、夕方の五時になつても「誰も雇つてくれないのです」と言つて立っていないなければならない人達、あるいは、そういう場合もあるわけです。もし自分がその一人であつたら、この主人の支払いの仕方は、どんなに有り難いことか、助かることか。一日一デナリという当時の労賃は、ちよつと労働者が一日生活するに要する賃金であつたと言います。たとい一日働けなくても、人は一日の生活の掛かりは同じなのであります。東京の山谷や、大阪の釜ヶ崎の、いわゆる日雇労働者の生活のことを聞かなくとも、私どもは、今朝も小林先生から医療の面での、そうした不都合のことを伺つたばかりであります。

聖書学者の言うところによりますと、当時イエス

の周りに集まっていたのは、あるいは取税人であり、あるいは遊女すなわち性を売らなければならなかったような女性たち、また、罪人として軽蔑されていたような人達であった。この人達こそは、イエスの話を聞いて、自分たちを、この最後の者、五時にしか雇ってもらえなかった人達に重ね合わせて考えることが出来た人達だと。しかし、その反対に、そうでない人達もいました。自分はそういう連中とは違うと威張る律法学者であるとか、パリサイの徒というような人達です。イエスは、この譬え話を、「私が気前よくしているので妬ましく思うのか」という疑問文で、厳しい問いの形で終わっておられるのですが、その問いが向けられたのは、実にこういう人達であった。しかし、考えてみれば、その厳しい問いは、私たち一人一人に問いかけられている。今も、イエスは私たちと同様に問いかけておられるのではないのでしょうか。「君はどこに立って、私の話を聞いているか」と。

一日の何時から働くにしましても、「何もしないで広場に立っている人々」と聖書は言いますが、これは、まさに私たち人間ではないのでしょうか。私たちは皆、人生の広場に出て、人生とは何か、人生の目的は何か、人生は生きるに値するか、と模索しているわけです。天の国とは、そういう私どもにとつてのぶどう園、すなわち働く場所であり、意味と目的をもつて生きる場のことでありましょう。そして実は、それは私たち自身で獲得出来るものではない。ぶどう園の主人が、自ら夜明けにも、九時にも十二時にも、三時にも、五時にも出掛けて来て、私たちが雇って、私たちをそこで働かせてくれるのであります。しかも、そこでは誰が何時間働いたとか、誰の働きぶりがどうだったとか、誰はぶどうの摘み方がうまいとか、へたとか、そういうことに一切関係なく、労働者の全部に等しく一デナリ、最後の者にまで、一デナリが支払われるのであります。

これを価値基準の転倒とでも言うのでありましょ

うか。人間をその能力であるとか、その成果によつては、決して価値付けない。私たちの社会は、すべてのことを、その能力とか、成果とか、効率とか、そうしたことだけで価値付けているのであります。このぶどう園では、全然その反対だというわけです。そこでは、人間が人間であること、人が人として存在していること、そのことだけに価値があるとします。エーリツヒ・フロムという社会学者がおりますが、彼の言葉を借りますと、「人間の価値は、持つこと to haveにあるのではなくて、在る in と、 to be にある」ということです。当然のことながら、この価値付けによれば、人は皆一デナリ、能力があるうがなかりうが、心身に障害があるうがなかりうが、人生の成功者であろうが落伍者であろうが、何々を持つていようがいまいが、すべて一デナリであります。イエスは、このことを天国の消息と言われたのであります。

北森嘉蔵という神学者は、「この譬え話の主題は

平等である」と言っています。全部の人が等しく一デナリという、この平等、これは本当の平等であり、これこそ絶対の平等と言うべきでしょう。絶対でありますから、残念ながらこの世の中にはこのような平等は実際には存在しません。

この世の現実には、イエスがもう一つの優れた譬え話、今日はそれは読みませんが、皆様よくご存知の「タラントの譬え話」(マタイ二五・一四〜三〇)が適確に示しています。あの話では、三人の僕が主人からおのおのその能力に応じた莫大な金を託される。この「能力」はギリシャ語では「デュナミス」で英語のダイナマイトの語源ですが、人はそれぞれそれが点火されればものすごい爆発を起すことができる、その人固有の能力をもっている。しかもそれに対して、その能力を十分に発達させ展開させるに必要な資金、すなわちタラントも与えられている。「タラント」は金銭の単位ですが、こんにちでは「天賦の才能」などという訳語が使われていることはご

存知の通りです。この譬え話が語る大切な点は、人はみなその固有の能力に応じて必ずやタラントを与えられているのだから、能力を爆発させて託されたタラントを十二分に使うことである、ということだと思います。言いかえれば、人はみな能力において異なる存在だということです。その点で人は平等などということとは決してないのです。人はみな違う。人はひとりひとりそれぞれであって、それぞれに生きるべきである。それこそ、そのことが独立の人格ということなのです。大切なことは、その現実をしつかり見すえて、この人間社会に平等などはないということを知ることでないでしょうか。みな同じではなくて、ひとりひとり違うことこそが素晴らしいと考えるべきではないでしょうか。有りもしない絶対の平等が、我々の中にあるとか、無ければならないと考えるような錯覚を、私は「平等幻想」と呼びますが、そういう平等幻想に陥ったり、それに振り回されたりしてはならないと思います。

北森先生はこの「タラントの譬え話」の方の主題は「公平」だとも言っておられるのですが、現実の社会の中では、この公平であること、フェアであることだけが大切なのだと思います。この主人の僕たちへの評価こそが：それぞれの僕たちの能力を実に正確に見ぬいていたこととともに、本当の意味で公平と言えるものです。

しかし、「ぶどう園の労働者の譬え話」は違います。これは「平等」の話です。ここにある人間の価値付けは公平の価値付けとは、全くちがいます。そして公平であることはとても大切ではありますが、しかしもし私たちが、この平等を、世の中では現実になっっていないのだけれども、有ると信じ、真の平等はそれしかないと信じて生きなければ、私たちの中に、本当の幸福とか、福祉とかいうものは有り得ないでありましょう。

皮肉なことですが、平等幻想は平等を求めながら必ず差別を生みます。現在の教育、私も少しくそれ

を仕事としてきた人間であります。教育の最大の問題の根は、この平等の誤解、すなわち「平等幻想」にあるような気がいたします。そして平等幻想のあるところには、公平も実現されません。公平と平等はちやうど表裏一体の関係にありますのであります。

ところで、この話は「ぶどう園の労働者のたとえ話」と呼ばれていますが、実はこの話の主人公はどこまでもぶどう園の主人です。「ぶどう園の主人の譬え話」、彼が自ら広場に出かけて行って、労働者を雇い、自らの裁量で監督に貸金を払わせる。そして不平を言った人達への答えの中で、「私は、この最後の者にも、お前と同じように支払いたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしてはいけないのだ。」と反問しています。もし、この主人を神になぞらえるとすれば、このことは私たちに人間の価値と、いうものは、決して人間固有のものではない。タラントが、神が下さるものである以上に、これは神が「この最後の者」にまで、「自分のものを自分のし

たいように」支払って下さったものである、ということを示しております。この価値付け、すなわち、すべての人が全く等しく一デナリであるという価値付けは、従って、絶対のものでありまして、比較すること許さないもの、妬ましいなどと、決して思つてはならぬもの、ただ、感謝して、この主人が言つたように、自分の分を受けとって帰るべきものであります。

この人間の絶対的価値は、実はこの譬え話を語られたイエスご自身が、その生と死のすべてをもつて、私たちに支払って、すなわち与えて下さったものであります。言いかえれば、この一デナリ、この平等は絶対の所与なのであります。

こうして、この譬えには、少しく信仰の言葉で言えば、神の恵みの絶対性と、神の救いの普遍性、これを万人救済の事実なども申しますが、それが実に明確に、豊かに語られているのであります。

この譬え話が言おうとしていることは、もうこれ

ですべてであります。二つほど付け加えます。

一つは、労働という問題です。これは私がこんなことを申し上げる力も資格も無いのですが、かつてある講座で松田智雄先生から習ったことを、ご紹介いたします。ただし私が聞いて理解した範囲でありますから、あるいは間違っているかも知れない。ご専門の方がおありでしたら、どうぞご叱正いただきたいと思いますが、私の責任で理解したところによると、こういうことです。

経済学の言うところによると、労働は必ず自分の生活を維持する以上のものを生み出す。この譬え話で言うと、夕方の五時に来て、一時間しか働かないで、一デナリもらった人があるということは、その一デナリは、実は人が一人一日生きていくのには、必ず必要な経費ですから、これは早朝からまる一日働いた労働者が代って支払ったことになる。一日働いた人は、あとの十時間程は他人の為に働いたということになるわけです。これを剰余労働と言って、

それによって生み出された価値が剰余価値、マルクスはこの剰余価値生産の秘密を明らかにして、労働者が、自分自身の生活維持以上に働くこと、つまりは他人の為に働くことでありますが、そのことは生産手段の所有者、この譬え詣で言いますと、ぶどう園の主人ということになります。その搾取であるとした。これがマルクスの剰余労働理論と言われるものだそうです。そうしますと、この譬え話をイエスの経済学ととると、彼はマルクスと同じ理論に立っていると云えます。ただイエスは剰余労働を、マルクスのように搾取を生み出すものではなく、愛を生み出すものととらえたのでした。他人の為に働くことこそ愛でありますから。そして、他人の為の労働は、たといマルクスが言う搾取が消滅する社会主義社会においても、決して変わることはないであります。このイエスの剰余労働理論を、先程申しました価値基準の転倒と言わずして、何と云いましょうか。

一デナリというのは、生活に必要な金額であって、決して労働に対する対価ではない。私たちは皆、それぞれの労働に対して必ずしも同じ対価をもらうわけではない。そうであれば労働の喜びは失われてしまふでしょう。この労働の不合理性の中にこそ、実は労働の本質があると言ってもよいのではないでしょう。何故なら、働くことは生きることであり、人の生き甲斐と、人生の充実は、労働の中に見出されるべきものだからであります。しかし、皮肉なことで、労働そのものが自己目的化してしまうと、今度は人は過労死する程に、無意味なもののために働くという悲劇を生み出して行くことも、皆様よくご存知のことです。これは、また別な話になるうかと思えます。

朝早くから働いた人は、何よりも健康で、早起きが出来、第一番に雇ってもらえて、この一日失業の心配もない。暑い中、一日中力一杯働くことが出来て、一日の生活に十分な賃金をもらった、こんな素

晴らしいことはない。私には、このような自覚が内村の言う独立の人のそれではないかと思われるのですが、いかがでしょうか。内村には、それが人間の当然の有りようだと考えられたのではないのでしょうか。しかし、この話の中の朝早くから働いた大部分の人たちは、そうは考えませんでした。

一方、夕方まで誰からも雇ってもらえず、「何もしないで一日中広場に立っていた」人達は、どんなにいらいらし、不安に思い、惨めな、寂しい思いに打ちひしがれていたことでしょう。もちろん、そうになったのには彼ら自身の問題もあったかも知れないし、あるいは怠け者であったとか、ぼやぼやしていたとか、仕事が入りに出来なかったとか、そういうことも確かにあるでしょう。しかし、世の中には一所懸命働きたくても、働けない人もいます。心身に障害があったり、病気であったり、家庭の事情があったり、世の中の制度にうまく入っていけない場合たり、いろいろな理由で働きたくても働けない場合

もある。失業して、次の働き場所が見つからないということもあるでしょう。自分の能力の生かし場所がない、今、多くの若い人達が、いわゆる不況と言われる状況の中で、そういうことを経験している、苦闘しております。また、世の中には、障害のある人とか、あるいは子供であるとか、高齢者であるとか、あるいは女性であるとか、外国人労働者であるとか、そうした不利な立場に、どうしても置かれやすい、そういう人達もたくさんあるのです。

それに比べれば、朝早く働ける人は、そういう人達の為に一所懸命働くべきではないでしょうか。これは私のような素人が言うようなことではないのですが、福祉社会における社会保障とか、保険などによる社会連帯の制度、各種のボランティア活動など、ひいては、南北格差是正のような国際連帯の問題に至るまで、すべてはこうした考え方、すなわち、自分の為にだけではなく、他人の為に働く、いわば、イエスの愛の剰余労働理論によらないでは、考えら

れないことのように思います。そうして読んでみれば、この譬え話は、随分現代的な問題を含んでいると言えます。現代日本に生きる私どもが、労働能力とか、偏差値とか、そういうものだけを基準にして、人の優劣を、その人間の存在、*to be*に至るまで決めつけてしまうようなことをしていることに対して、この譬えは、何と厳しい批判をしているではありませんか。

もう一つ、付け加えることは、最後の「あとの者が先になり、先の者があとになる」という句についてであります。これは、どうもこの譬えに合わない、ただ話の表面的なことで、遅く来た者が先にお金をもらったということを行っているのか、あるいはこういうことわざがあるので、付け加えてみたのか。いずれにしてもこの言葉は、明らかにこの譬え話の中にあるものではなくて、全然別の、そういう独立したことわざがあとから付け加えられたのだらうというのが、聖書の注解者たちが言うことであります。

多分、そうでありましょう。そこで問題となるのは、それでは福音書記者が原資料にこれを付加した意図は何か、ということですか。

この譬えは、「わたしの気前のよさをねたむのか」で終わっています。この「気前のよさ」は、朝の小林先生のお話で、「パルナバが『立派な人』とあるのは、『良い人』の意味だ」と言われたのですが、多分同じ言葉だと思います。「気前のよさ」とは「良い」、「あの主人は良い人だ」ということで、それに対して「妬む」は「悪い」という意味で、善と悪とを対照させているのです。主人は「私が良いので、君達は悪い目で見えるのか」と、非常に激しい言葉で非難した。それは、私たち、これを読んでいる者への問い掛けでもある。私たちは、それに対して、どう応答するのか。これは私の勝手な読み方ですが、この言葉を付け加えたのは、そのイエスの問いに対する福音書記者自身の応答のように思われます。応答として、あとからこの恐らく諺と思われる言葉を

付け加えたような気が、私にはするのであります。それは今申しましたイエスの問い掛けに対して、当時の、すなわちこの福音書を生んだ人達が応答しようとして、私たちの答えは「これです」と言って差し出したと、読みたいのです。聖書というのは、何時も、そういう読者の応答を本文に加えて、加えて、また加えて成って来たものです。だから、私たちも、自分の応答を聖書の中に加えて行きたいと思うのです。

それで、私はそういうふう読んで、最後の言葉の意味を勝手に考えてみますと、どうもこういうことではないか。言ってみればこの譬えの後日談ともなるわけですが、先程から申しますように、いろいろな理由で、あとの者となった人が、ぶどう園では一時間しか働かなかった。ところが、この主人は一番先にお金をくれた。しかも、皆と同じ一日分の一デナリくれた。彼らの働きはみな同じ一デナリと価値付けられた。その時、その人は、その瞬間から、こ

んどは自分は早朝から他人の為に、汗水たらして働く「先の者」になろうとする、ということではないか。これがこの譬えを自らへの使信として聞いた人間の応答である、応答でなければならぬ、という気が私にはするので。それが初代の信徒たちの応答であったと考えていいのではないかと思うのです。自分を顧みては嘆き、他人を見ては妬ましく思っていた人間が、自分の「人としての真の価値」を見出されたとき、彼の感激と喜びは如何ばかりであるでしょうか。

こんにちの人間疎外、すなわち人が、自分に対しても、他人に対しても、何か白々しくなっているというような状態、の不幸は、こうした新生の経験、精神の高揚、そうしたものが無くなってしまっていることにあるのではないのでしょうか。

もう一度申します。この譬えにおいて、朝から働いた人が、一時間しか働かなくて、同じ貸金をもらった人のことを妬まずに、自分が他人の為に少しく

働けたことを感謝し得た時に人は独立人となる、と先に申しましたが、それとは反対に、いやむしろそれと同様に、この「最後の者」であった人間が、主人の善意、グッド・ウイルに感激して、その翌朝は真先に広場へ行って、雇ってもらうことを願うときに、人は謙遜、先の内村の言葉で言えば、「自分は無一物であるという自覚」から一転して、「独立の自覚」、「人間としての自負」に支えられた「独立の自覚」へと導かれて行くのであらうと信じます。

むすび

内村は一夜、札幌同窓の木村徳蔵に招かれて、語り合った日のことを日記に記しております。彼の晩年、亡くなる六年位前のことだっと思えます。彼は、四十年前の札幌において、「如何なるキリスト教が人類を救うに足るか」という問題を提供されたと、その日記の中で言っております。また、これはそれよりはもっと前のことではありますが、この時彼は既に『聖書之研究』を発刊して、もう八年位にな

っておりましたが、ちょうど今も使われている今井館という彼の聖書講堂が今井氏の寄付で建って、彼の伝道の日々も充実を加えていた頃であります。齢五十歳になろうとする内村が宮部金吾へ手紙を送りまして、その中で、「キリスト教とは何ぞや、それは、信ずるの価値ありや」、実はこれは英語で書いてありまして、日本語の手紙の中にここだけ英語で、

≪ What is Christianity? ≫ ≪ Is it worth believing? ≫

そして、「これが矢張り最大問題に御座候」と書き送っております。内村は終生この「最大問題」の中に生きて人でありました。

こんにち、人はこのような深刻な問いを發することを好みません。キリスト教とは何ぞや、キリスト教は信ずるに足るか、如何なるキリスト教がこの混乱した時代の人類を救うに足るか、というような問いは、余りにも深刻で、多くの現代人はこれを負うことが出来ないし、負うことを好まないようにも見えます。

キリスト教であれば何でも良い、要はその勢力を抜けることだ、とでも言いたげであります。しかし、私はこのような時代、激動の時代、先行き不透明の時代、しばしばキリスト教の名によってさえも戦争が行われるような、こうした時代であるからこそ、私もキリスト者は、そもそもキリスト教とは何か、如何なるキリスト教が人類を救うに足るか、自らに問うてみる必要があるのではないのでしょうか。

そして私は、今日、はなはだ不行き届きなものでありましたが、些かの考察を加えて来たところに従って、内村の用語、これは何も彼の用語による必要は必ずしもないので、彼の用語によれば、「独立的キリスト教」こそ、それではないかと信ずる者であります。「独立的キリスト教」とは、すなわち、「良き方、善なる方」の愛の故に、自らが「この最後の者」であることを深く自覚するが故に、最早人に頼らず、自分をも含めて何者にも頼らず、一切を相対化することによって、一デナリの価値付けをし

て下さった方以外には、誰にも何ものにも負わないとする独立の人、そして、その独立の人として、すべての「最後の者」と共に生きようとする、そういう独立の生き方へ、ひとを生かしてしまおう、そういうキリスト教、これが「独立的キリスト教」であると信じます。これが、ただ一つ、私どもにとっての喜びの音信、福音となり得るキリスト教であると信じます。

言うまでもなく、この「最後の者」はつねに社会の少数派です。そしてこの譬え話の中で、そのことにはなかなか気が付きませんが、「朝からの人」は、これは多数派も多数派、大多数派なわけですね。ほとんどの人は「朝からの人」です。それに対して、この「最後の者」はいつも社会の決定的な少数派であります。マイノリティであります。私たちは、そのことを、この異教の国に在って、日々思わされている、よく知っています。しかし、そのマイノリティ、その少数派を生み続けて行く「独立的キリスト

教」こそが、いつの日にか社会のマジORITY、多数派を活性化して、動かして行くのだと信じます。これは決して容易なことではありませんが、そういう「独立的信仰」をもつて、希望と愛の中にしっかりと生きていきたいと願うものであります。長時間、ご静聴、ありがとうございました。

（所載）札幌独立教会報 211号（一九九五年二月・

三月号合併号）

札幌独立キリスト教会